

《投稿論文》社会構成主義の現在 : 社会問題の エスノメソドロギー的理解を目指して

著者	岡田 光弘
雑誌名	年報筑波社会学
号	5
ページ	1-46
発行年	1994-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/108169

社会構成主義の現在

ー社会問題のエスノメソドロジ的理解を目指してー

岡田 光弘

《キーワード》

エスノメソドロジー、存在論上の恣意的線引、社会構成主義、相互反映性

《目次》

- I. まえがき
- II. 社会構成主義の諸類型
- III. オントロジカル・ジェリマンダリングという汚名
- IV. エスノメソドロジーと「存在論」
- V. エスノメソドロジーにおける相互反映性の多義性
 - ①自己言及としての相互反映性
 - ②循環関係としての相互反映性
 - ③コミュニケーションにおける意味確定の事後的性格
 - ④相互反映性と信頼概念について
- VI. おわりに、あるいは医療化をどのように考えるか

I. まえがき

社会問題における社会構成主義⁽¹⁾は、いま大きく揺れている⁽²⁾。社会構成主義は、スペクターとキツセが『社会問題の構築』[Spector & Kitsuse, 1977]で描いたプログラムにそって社会問題の社会学の領域で数多くの経験的研究を生み出し始めていた。筆者は医療化についての興味・関心から社会構成主義を名乗るこうした経験的研究[Conrad & Schneider, 1980a]のいくつかに接した。筆者の目からみても、そこには明るい将来が待っているように見えた。だが、その足元をすくったのは、エスノメソドロジー（以下、EM）に近い立場で科学社会学の研究を行なっているウルガーらが『社会問題』誌で発表した「存

在論上の恣意的線引 (ontological gerrymandering) : 社会問題について説明を解剖する」[Woolgar & Pawluch, 1985a]での論難であった。これは、社会構成主義が「存在論上の恣意的線引」を行なっている、すなわち、社会構成主義は対象に対する態度として、都合のよいときだけ相対主義を適用する選択的相対主義であるという論難である。(以下、ここで非難された社会構成主義の行なう概念操作を「存在論上の恣意的線引」、これを指摘したウルガーらの論文名は「OG論文」と略記する。)

それ以降、社会構成主義の立場をとるものにとって「存在論上の恣意的線引」の取り扱いが一つの踏絵となっている。後で詳しく述べるように、現在「存在論上の恣意的線引」へのスタンスの違いから、社会構成主義の内部には大きく三分区⁽⁸⁾が生じていると言われている。自分たちは「存在論上の恣意的線引」を行っていないとする厳格派、線引を自覚的・戦略的に行なっているとする文脈派、それを行なうことに何ら問題はないとする脱構築派の三つである。いずれにしろ、社会構成主義のプログラムに従って経験的研究を行なっていくとすれば「存在論上の恣意的線引」に対する態度決定を迫られる。それゆえ、これについて細部にわたって腑分けしておくとなかなか都合がよいだろう。

先々の見通しをよくするために、本論文においてこれから行なっていく議論の手順について触れておく。まず、「存在論上の恣意的線引」についての議論に入る前に、2章において社会問題における社会構成主義の理論的前提と説明の特徴を明らかにする。先取りして言えば、それは「(社会)問題は問題だから問題視される」という方向から「問題視されるものが(社会)問題である」という方向への視点の逆転と、ある対象を「社会問題だ」とする指摘には社会・歴史的な力に媒介された複数性があるという論理構成の二つである。次いで、3章においては、ウルガーの言う「存在論上の恣意的線引」がいったい何を問題としていたのかが示される。「存在論上の恣意的線引」への批判は、研究者が(暗然に)客観主義的二分法に基づいているのではないかという論難と、果たしてこうした二分法自体が可能なのかという問いの二つの要素から成り立っている。そして、その批判が社会構成主義者側にどのような反応を引き起こしたのかが明らかにされる。

続く二つの章においては、社会構成主義につき付けられた「存在論上の恣意

的線引」という論難を乗り越えるための手掛かりを、その知的源泉の一つである EM に求めていく。具体的には、EM の認識論的な前提となっている「同一説」、「信頼」、「相互反映性」など一連の主要な概念について、ガーフィンの博士論文 [Garfinkel, 1952] からサックスとの共著 [Garfinkel & Sacks, 1970] まで通底する点（「対応説」批判・「構築的分析」批判）との関わりの中で概説する。「OG 論文」でのウルガーらの批判とそれに引き続く一連の論争について EM の視点から整理・乗り越えをはかるための橋頭堡づくりが目的である。一言でいえばここでは、成員が「説明 (account)」行為という形で行なう対象の構成とその構成作業の隠蔽とを「説明」のもつレトロスペクティブ（事後的・遡及的）な性質に焦点をあてることで明確に示すことが試みられる。やや具体的に順をおって示そう。「同一説」として示された「存在論」について語られる 4 章では、日常生活において対象の構成と隠蔽が行なわれているということが明らかにされ、5 章では「相互反映性」として主に対象構成の論理が、「信頼」としてその作業の隠蔽の機序が語られることになる。

最後に、そこで得られた観点から「存在論上の恣意的線引」の腑分け・整理を行い、医療化という事例に当てはめてより EM 的な社会構成主義に今後の可能性について論じる。結論を先取りしておこう。繰り返して言えば、ウルガーらの問題提起は二段階になっている。1. 社会構成主義が、研究者は状態について客観的に知っていて／成員は知らないという客観主義的二分法に依拠しているということ 2. そこでは研究者の行なう理論化という構成的作業が隠蔽されていること また、そうした構成作業の隠蔽なしに、果たしてそうした客観主義的二分法は成り立つのかということであった。このうち前者、客観主義的

二分法の問題については、EM の理論的展開を辿っていくことで、社会構成主義が成員の知識主張の記述という、これまでの客観主義とは「非対称的に」異なった固有の記述対象を持ち得るといった解答がなされる。また、後者の構成的作業の隠蔽という点については、EM にも同様の批判が当てはまるとして本論文では結論が持ち越される。ではまず、次章において、社会構成主義の理論的前提と前提のヴァリエーションに由来する内部での区分について考えていこう。

II. 社会構成主義の諸類型

歴史的にその成立を振り返ってみると、社会問題の社会構成主義はそれまでの客観主義的な社会学が持っていた二つの欠点に注目し、社会問題という現象を適切に取り扱うために生まれた。その二つとは、「1. 社会的状態を社会問題であるとして認定する主観的判断を無視していたこと 2. 彼らがほとんど共通性が見られない状態を社会問題としてラベル付けしていたため、より一般的な理論をそこから生み出せなかったこと」[Best, 1989b:243]である。これに対して社会構成主義は「社会問題はなんらかの想定された状態について苦情を述べ、クレームを申し立てる個人やグループの活動である」（傍点、原著者）[Spector & Kitsuse, 1977:75=1990:119]とする研究方針を採用することでそれまでの客観主義的な研究とは別の研究プログラムをうち立てようとした。このプログラムのもつ重要な要素はすでに逸脱研究におけるレイベリング論がその方向性を示してくれていたものである。このレイベリング論が行なった転回（(a) 逸脱⇒統制という矢印の方向性を (b) 統制⇒逸脱という向きに逆転させたものであり、以後これをレイベリング論的転回と呼ぶ）⁽⁴⁾を社会問題研究に応用することによって社会構成主義は、社会問題が個人やグループの主観的判断によって作り上げられるという側面を扱えるようになった。図-1はこの関係を示している。また社会構成主義が研究の対象とする定義過程は、本来「研究者だけでなく成員もまたクレームをクレームとして認定し、解釈する」（傍点、原著者）[Spector & Kitsuse, 1977:79=1990:124]という公共の性質を有するので、これを一般的に取り扱うことが可能である。こうして社会構成主義は、これまでとは全く異なった研究プログラムを採用することで、客観主義的な社会問題研究のもっていた欠点の 1. 問題構築の際の主観的側面の無視と 2. 探求対象の一般性の欠如を克服したように見えた。

ここでは議論の焦点を社会構成主義におけるレイベリング論的転回の持つ意義におこう。この転回において (b) 統制⇒逸脱の矢印が意味しているのは、因果・構成関係である。ここで言う因果・構成とは、社会問題が定義に先んじて実在し、現象の問題視によってそれが認定・増幅されるという論理構成である。

因果・構成関係によって「問題視が問題を作り上げる」のではあっても「問題視が問題を構成する」すなわち「問題視に先んじて真の問題などない」という形の徹底した構成論的主張ではない。例えば、部分的にせよ、宝月がベッカーの言葉を借りて言うように「逸脱者経歴の発達過程においては、逸脱行動の最初ないし初期の段階で作用する要因と、逸脱の継続段階さらには常習化の段階で作用する要因とは必ずしも同じでないことに注意する必要がある。…逸脱への明確な動機は逸脱の体験を積み重ねる中で徐々に形成される」（傍点、引用者）[大村 & 宝月, 1979:249]といった過程の探求が目指されている。「逸脱」が逸脱になっていく、「問題」が問題視によって問題になっていく過程の（因果）説明が目指されているのだ。そこに対象の構成という関係がもりこまれていた場合でも、それは因果関係を研究対象として措定する客観主義とのアマルガムとなっている。すなわち、図－1中の矢印は向きの如何に関わらず、幾分か、客観主義的色彩を帯びている。

また、図－1についてここで述べておいたほうが良いのは、(a) 逸脱→統制という方向において行なわれる説明や定義といった行為は、レイベリング論においてとは違って「真の対象や状態」⁽⁵⁾を「透明」[Heritage, 1984:139]に指し示す「鏡」⁽⁶⁾のようなものとして観念されているので、原理的にその存在が無視できるものになっているということである。

重要な点を繰り返せば、レイベリング論的転回によって、定義が対象を構成するという視点は生まれたものの、因果説明を求めるという点で、定義過程とは「別のどこか」に対象そのものが存在するはずだという対象の実体視は拭い

図－1 状態と定義についての認識図式

- (a) □ ← ○ 構造機能主義に代表される客観主義的社会学
 (b) □ ⇒ ○ レイベリング論的転回

凡例：□は、定義・説明、○は、状態・対象、
 →は、因果関係を、⇒は、因果・構成関係を表す。

去られないままになっている。客観主義が忍びこんでいるのだ。これが社会構成主義に次に述べる矢印の複数性を持ち込み、矢印の方向性を含めて、対象についてのいくつか矢印（説明）のうちでどの矢印が客観的に正しいのか、どちらの矢印により多くの真理が含まれているのか、という問いを呼び起こすことになる。

次に、(a)(b)の図式を精緻化をはかろう。ウルガー [Woolgar, 1983] ⁽⁷⁾ は、社会構成主義の行なう説明の前提に、同一の対象について異なった複数の説明・定義が行なわれていること、それぞれの説明・定義は社会・歴史的な力（価値、利害など）によって媒介されているということがあると言う。この前提に従えば、同一の対象に対する説明・定義は、社会的な力によって規定される立場の違いにしたがって多様であるということになる。

矢印の複数性を考えに入れた場合、一方において、説明・定義の間に優劣の差があるのだと考える立場が存在する。この立場はある意味で、対象と説明、状態と定義についてのわれわれの常識的理解にもっとも合致する。これは後に再度触れられることになるガーフィンケルの理解したパーソンズ (Parsons, T) の「対応説」に代表されるような立場である。医療化を例にとつて言えば、西欧医科学は、これを裏で支えるエスノ・セントリズムにしたがって、西欧医科学で対象としている疾病を自分たちとは異なった形で扱ったり、全く疾病としての扱わない医療を「同一の対象」についての別（未開）の説明としてみるだろう。西欧医科学の説明の首位性を信じるものにとつてそれは、遅れや誤りに満ちた説明なのである。これは、図-2の(c)のように多様な因果説明（但し、ここでの説明は対象を「透明」に指示しているので図では無視されている）の存在は認めるが、その間で序列付けを行なう立場である。

また、ウルガーらによれば、広義の社会構成主義は、建前において「真の対象」への近似を主要な関心としないという。彼らは「問われるべきなのは、どの説明がより正確さ、真実性、あるいは優美さの程度が高いかということではなく、複数の説明の競争または葛藤の結果、どのようにしてそのうちのあるものの受容が決定されるかということだ」 [Spector & Kitsuse, 1977:64=1990:101] と言うが、その実、説明・定義には複数性があり、その間には「真の対象」への近似度に応じた優劣はあるとする立場にたっている。これは図-2に(d)で

示されている。

他方、矢印の複数性を、それは文化相対主義を徹底して主張している、という方向で読み取ることが可能である。同一の対象についての複数の解釈の可能性を認めるとき、原理的には、そうした説明・定義の間に優劣の差はないはずだからだ。このような方向で矢印の複数性を採用しようとする立場、社会構成主義の中で自覚的にこの立場を選択しているのは、フォールらの脱構築主義者 [Pfohl, 1985] である。これは図-2 に (d)' で示した。この図において (d)' は、レイベリング論的転回を経ているため、矢印の向きが逆転している⁽⁸⁾。但し、ここで重要なのは、矢印の複数性とその太さの違いで示された（どの説明が首位性を持つものかという）地位の違いである。

注目すべきなのは、これまでの認識図式はどれもすべて、さまざまな定義によってさまざまに切り取られた疾病像のうち、どれが対象の真の属性により近いのかということについて定義の間での争いを許す [Strong, 1979] [Conrad & Schneider, 1980a] [Conrad & Schneider, 1980b] [King, 1987] ようなものとなっている、ということである。すなわち、医療化の経験的对象である疾病を例にとって言えば、疾病の定義の多様さを担保しているのは、その生物学的・生理学的性質であるということになる。ここでは同一の対象を概念枠にしたがって切り取るという新カント派的な認識論が共通の前提となっていることが分かる。

図-2 説明・定義の複数性についての認識図式⁽⁹⁾

- (c) □ ← ○ パーソンの現象学・客観主義的社会学の認識図式
 □ ← (多様な価値の基づく多様な認識図式が存在を認めながら、科学者の図式に首位性を与える。)
- (d) □ ⇒ ○ 広義の社会構成主義者の認識図式
 □ ←
- (d)' □ ⇒ ○ 概念枠相対主義者、あるいは脱構築主義者の認識図式
 □ ⇒ (中心的な認識図式に対して、同じだけ根拠があり、同じだけ無根拠なものとして自らの認識図式を提示する。)

凡例：□は定義・説明を、○は状態・対象を表す。⇒は因果関係を表す。

⇒は因果・構成関係を表す。→は研究者によって重要さが認定されていないが、存在は認定されている因果関係を表す。

これまでの纏めを行なっておこう。社会構成主義の基本的な回答は図中 (d) として示されるようなものである。これは先に (a) で示された最も徹底した客観主義から、二つの点で転回を経ている。状態の因果関係を透明に写しだす定義（状態⇒定義）から定義が状態を作り出す（定義⇒状態）への定義の持つ役割の転換（レイベリング論的転回）であり、そうした定義の複数性である。このうち矢印の逆転は、社会問題を研究する際に、問題の構成がもつ主観的な側面を理論のうちに取り込むという課題から生じたもので、レイベリング論を経由して社会問題の社会構成主義に顕著に現れる。一方、矢印の複数性の主張は、説明の対象となっている事象が社会・歴史的諸力による媒介を受けているという側面を強調している。この主張は、科学社会学での社会構成主義の中心的主張となっている。そして、両者が混ざり合って、社会構成主義において定義とそれを媒介するものを重視するという研究方針が力を持つことになる。これまで繰り返し述べてきたように、また後に詳しく述べられるウルガーらによる批判がこの点に徹底して攻撃を加えているように、「定義を扱う、重視する」という建前の裏に、定義がそれ「について」行なわれる「真の対象」が実在するという客観主義的認定が隠されている。

III. オントロジカル・ジェリマンダリングという汚名

まず、ウルガーらの議論の要点を纏めてみよう。彼が行なおうとしたのは、推論、説明、説得、理解といった「アーギュメントのエスノグラフィー」[Woolgar & Pawluch, 1985a:214] である。そうした作業によって見えてきたのは、以下のことであった。社会構成主義者が「状態が恒常的であり、それについての定義は複数ある。この複数性は定義が社会・歴史的達成であることに由来する」というこれまで述べられてきた前提に立って研究を進めることは 1. 対象の認定において、建前とは違って、客観主義に陥っており（客観主義的二分法の採用）、2. 理論化に際しての自らの客観主義への関与を隠しているということであった。後者はさらに、果たして客観主義への関与を徹底して避けるこ

とは可能なのかという問いに姿をかえて5章2節の自己言及としての相互反映性のところで触れられる。とりあえず、この2点をウルガーらに従って復習しておこう。

著者たちが見落としているのは、状態や行動が変わっていないという言い方自体が定義的な主張になっているとも言えるということである。状態に名前をつけ、特定化し、記述する際に、彼らはすでに・不可避に、議論の対象になっている推定上の行動や状態に定義を与えてしまっている。彼らの議論の対象であるクレイム・メーカーの主張は説明の対象である（定義という）社会・歴史的構成物として描かれているのに対して、著者たちの主張と構成的作業は、背後に隠され所与のものとされている。（括弧内は引用者による。以下同様）[Woolgar & Pawluch, 1985a:216]

客観主義への関与とその隠蔽という二つの働きを持つこの選択的相対主義に対して「存在論上の恣意的線引」という名称が与えられる。こうした客観主義への関与とその隠蔽は、社会構成主義に説明力を与える源泉でもある。「相対主義を選択的に適用することは、現象を（社会学的説明のためのトピックをうちたてるという目的のために）‘社会的’であるとして解釈する際にも、社会学者自身の実践の社会的性格を否定する際にも、重要なのである」（傍点、引用者）[Woolgar & Pawluch, 1985a:224]。

では次に「存在論上の恣意的線引」として批判された社会構成主義の内部における理論的前提上のヴァリエーションについて考えてみよう。社会構成主義は定義を取り扱う、とは言ってもその意味するところには大きな違いが見られる。ウルガーらは、社会問題を形づくるのは、(a) 状態というより定義なのか、(b) 状態ではなくて定義なのか（強調、原著者）[Woolgar & Pawluch, 1985a:218]と問うた⁽¹⁰⁾。この踏絵の意味するところは、以下のようなものである。(a) 状態というより定義と言うのなら、それは明らかに「存在論上の恣意的線引」をしていることになる。またもし仮に、(b) 状態ではなくて定義だと答えたとしても、すくなくともこれまでの経験的研究は(a) 状態というより定義に依存して行なわれてきた、すなわち、定義の変異性を言う前提として状態の恒常性

を密輸入してきたと言える。そしてより根本的に、果たして (b) 状態ではなくて定義を扱う社会構成主義的な社会問題の研究は可能なのか[Woolgar & Pawluch, 1985a]と再び問うものだった。そして、後に起こった社会構成主義内部での対立もこのウルガーらの踏絵に対する答え方の違いに由来するものであった。「客観的社会的世界についての仮定として、いかなるものが適切であるのか、客観的世界というものについてすべての仮定が排除されるべきなのか、あるいは、なんらかの仮定は受け入れられるべきなのか、異なった仮定を受け入れることで結果としてどのような違いが生じるのかといった問いに対して社会構成主義者が異なった答えを用意した」[Best, 1989b:245] ことが社会構成主義内部での三分裂に繋がったのだ。

図示（但し、単純化のためここでは説明の複数性は部分的に捨象してある）してみよう。社会構成主義（図－3の①と②）は、社会問題にとって定義が状態より優先するという点で一致している。これらは図－1において一括して (b) レイベリング論的転回として図示された。但し、①の主張は、定義と状態を比べれば定義が、という形で状態の存在を暗黙に認めているものであるのに対して、②においては定義こそが社会問題を形づくるといって状態に対するいかなる認定をも否定する。①の立場は文脈 (context) 派の社会構成主義と呼ばれ、自分たちは定義ないしはクレイムの申し立てを社会的な文脈と関係づけるために敢えて「状態」に対する想定を行なっているのだという。一方、②の立場は厳格 (strict) 派の社会構成主義と呼ばれる。彼らに言わせれば、それを露骨に行なうにしろ行なわないにしろ、一旦「真の対象」はこれこれだという客観的状态に対する想定を行なってしまうと、結果的にそれは研究者が対象の認定において特権性を主張するということになる。このような形で客観主義に与するかしないかという点を規準としてとれば、先程とは別に対立の構図は、② 厳格派 対 それ以外の客観主義的社会学ということになる。

社会構成主義と呼ばれる立場の中でも、①文脈派や②厳格派のように定義と状態との関係に理論的な拘りを見せない研究が行なわれてきている。先に図2において (d)' と名付けられたこの立場は、脱構築主義の立場である。この立場は、因果関係の主張は行なうもののそうした主張間に優劣をつけない、ないしは現存の優劣に「すべての説明はフィクションである」といった異義申し立て

図-3 社会構成主義内部での対立点

① □ ⇒ ○ 文脈 (context) 派の社会構成主義

←

② □ ⇒ ○ 厳格 (strict) 派の社会構成主義

(←)

凡例：□は定義・説明を、○は状態・対象を、⇒は因果・構成関係を表す。

→は重要視されない因果関係を、()は判断停止の対象を表す。

を行なうことにより支配的な価値を脱構築しようとしているという [Pfoh,1985] ものである。

疾病とそれをもたらしたりそれに由来したりする生物学的変化が存在し、そうした「真の対象」「について」様々な定義付けが可能であり、そうした定義の変化や複数性から定義というものの恣意性を批判し、西欧近代医学に代表される支配的な物語の無効化をはかるというスタンスに立つ医療化研究が、総体として脱構築の立場に近いことは明らかである。

では次に、果たして②厳格派の立場にたつ経験的研究は可能かという問いについて考えてみよう。自分は②厳格派の立場にたつとは言っても、その定義の複数性・可変性が認識可能になるには、状態の同一性が前提となるはずであり、これは必然的に何らかの対象「について」の定義という構図にならざるをえないという論難である。ウルガーらはこれを客観的状态と主観的な状況の定義という二本立ての道具立てを用いるすべての議論に共通するジレンマである⁽¹¹⁾と言う。果たして、そこは袋小路なのか？

本論文ではこれに関わって引き続く二つの章で、果たして、状態ではなく定義を、対象ではなく説明を研究対象とするということがどういうことなのか。それは如何にして可能になるのか、あるいは、「定義を扱う」という時、そこに必然的に生じるとされる客観主義的二分法（成員は対象について知らない／研究者は対象について知っている。研究者はこの二分法に基づいて成員の定義

を扱う)の乗り越えは如何にして可能になるのかについてEMを手がかりにして考えていく。

次章においては、ウルガーらが「OG論文」で述べた存在論(ontology)という問題にEMの観点から分け入ってみる。それによって見えてくるのは、日常生活においては背後に隠され所与のものとされている成員(研究者も含む)の構成的作業である。先取りして言えば、ここでは説明という行為が対象を構成しているという事実が「日常生活の態度」において常に隠蔽される⁽¹²⁾ということが示され、それが研究者が客観主義的二分法をとる根拠になっていることが示される。では、EMの理論的前提に分け入ってみよう。

IV. エスノメソドロジーと「存在論」

EMの存在論として「同一説」(congruent theory)と呼ばれるものがある。ガーフィンケルが彼の博士論文[Garfinkel, 1952]において、パーソンズに割り振った存在論が「対応説」(correspondence theory)でありシュッツ(Schutz, A.)のそれが「同一説」であった⁽¹³⁾。ガーフィンケル自身、シュッツの「同一説」によって社会秩序の問題を考えていこうというのが当時の試みであった。

人々の営みとはかわりなく存在している「真の対象」と主観による構成物である「知覚された対象」という道具立てこそが「対応説」の基本である。これに科学的な合理性に基づく科学者が対象に対して最も近似した像を描けるという仮定を付随させることで「対応説」は世界の複数性問題を回避し、科学者の営みに特権的地位を与えた⁽¹⁴⁾。ガーフィンケルがパーソンズに割り振った「対応説」にもとづく社会科学的な営みは、後のサックスとの共著では、「構築的分析」[Garfinkel & Sacks, 1970:340]と呼ばれた。

一方、ガーフィンケルがシュッツから引き継いだとされる「同一説」の「知覚された対象が真の対象である」というテーゼは博士論文において、以下のよう

に記述されている。

われわれが「世界」あるいは経験的構築物としての「世界」という時、

…そうした世界を超えたりアリティなどないのだ。究極のそして他に還元不可能な真の世界は、まさに知覚のなかにこそ発見されるものであり、決して単なる信号 (signal) の中にあるのではない。そしてこの前提は、経験的構築物が科学的にみて妥当であるかないかということには係わらない。(傍線、原著者) [Garfinkel, 1952:351]

こうした、一種の判断停止は、後には研究の方針としての EM 的無関心⁽¹⁵⁾というかたちで踏襲された。また、博士論文では物象化過程 e⁽¹⁶⁾として符号化された対象の構成とそこでの構成過程の隠蔽というそのプロセスは、後には相互反映性 (reflexivity) と呼ばれ、EM において主題的な記述対象とされていくことになる。

ここで「同一説」と「対応説」について図示しておこう。図-4 が示しているのは、それぞれの理論において、説明と対象との関係が「非対称的」に異なっているということである。「対応説」においても「同一説」においても行為者⁽¹⁷⁾は、説明行為とは「別のどこか」に対象が実在すると信じている。そして、説明とは理想的には「透明」な「鏡」のようなものであると観念している。このことはすでに述べたとおりである。しかし、観察者の眼からみれば、「同一説」においては他ならぬ行為者の知覚・説明行為が行為者にとっての対象を構成しているのである。

図-4 「対応説」と「同一説」

	「対応説」	「同一説」
首位性を持つもの	○	□
観察者による発見	□ ← ○	□ ⇔ ○
行為者による世界像	□ ← ○	□ ← ○

凡例：□は、定義・説明、○は、状態・対象、→は、因果関係を表す。

また、矢印⇔は、知覚・説明行為による対象の構成を表す。

この様子を明らかにするため、EM が世にでた、まさに最初の一文を見てみよう。

それがたとえ素人によって行なわれたとしても、専門家が行なっているにしても、社会学をすることになったら「真の対象 (world)」についてのありとあらゆる言及は、日常生活における組織化された活動への言及なのである。たとえそれが物理的な出来事や生物学的出来事についての言及であるときでさえ、その事情は変わらない。[Garfinkel, 1967a:vii]

この時点まで「同一説」的前提が引き継がれているとすれば、この一文からも「同一説」においては、対象の属性が説明を生み出すのではなく、説明行為こそが対象を生み出すという視点こそがEMそのもののなのだということが明らかになる。こうした説明行為を成員の行なう社会学として研究の対象とすることが明らかになる。EM が「社会の内側からの、社会学者による発見」(傍点、原著者) [Garfinkel, 1967b:76-7] であるとはこのことなのである。

では次に、博士論文における主張とは少し離れて「対応説」の適応範囲について考えてみよう。「真の対象」の存在を前提としてものごとを考える考え方は、「対応説」として割り振られた科学者独自の存在論ではない。日常生活も同様の前提に基づいて行なわれており、日常生活において生じる「同じ事柄」についての判断上の「如何ともし難しい不一致は、当たり前の事実の實在論的な把握が前提となって初めて生じる」[Garfinkel, 1964:58=1989:62] のである。もし成員が、現前に立ち現れる当たり前の事実を實在論的つまり「対応説」的に捉えないならば、「真の対象」をめぐる争いなど起きるはずもない。ポルナーは「日常生活の態度」にいる人々が等しく行なっているこうした推論を「世俗的推論 (mundane reasoning)」[Pollner, 1974] と呼ぶ。また、ここでこうした推論を生み出す存在論を「世俗的存在論」と呼べば、この「世俗的存在論」も「さまざまな見え姿の背後に真の対象がある」という背後図式を用いてさまざまな見え姿というものを調整しているという点で「対応説」と一致しているのだ。「対応説」的な存在論は、科学者の自己理解であるだけでなく、日常生活全体がこれに基づいて成立しているように見える。

ガーフィンケルがシュッツから引き継いだという「同一説」は、「対応説」といかなる点で異なっており、これを採用する認識上の利得とは何であろうか。ではまず、ガーフィンケルが立てた区分にしたがって「対応説」について見ていこう。「真の対象」がまずあって、社会的利害や価値といったさまざまな媒介によって変形を受けるとはいえ、それが原因となって知覚作用が生じると考える「対応説」の場合は、科学者が対象についての最も近似した像を結ぶことができるという仮定を導入して、認識図式の徹底的な一致を想定しないかぎり、経験世界の複数性を帰結する。「対応説」においては、われわれは原理上、対象そのものについては直接、知り得ない。なぜなら、観察には常に解釈図式が介在するからである。すなわち、対象の直接的認識を否定するというその前提を徹底すれば、どの説明が対象に最も近似するのかということを決定することすらできないはずの立場が「対応説」であり、認識論的には、弱い立場、相対主義なのだ。付け加えれば「対応説」は原理上、対象と解釈図式との距離を測り得ない。と言うのは、もしそれができるならばそれは、対象と解釈図式との距離を特定するための定点として対象そのものの位置が特定可能であることになり、前提と矛盾してしまうことになるからである。つまり、科学者の説明が対象に近似している根拠は、突き詰めれば、あくまでもその説明が科学者による説明であるからだということになる。「対応説」が世界の複数性問題を解決する存在論ではないことがわかった。では「同一説」はどうだろうか。

知覚や説明が対象を構成しているとする「同一説」は、「同一説」をとっている人々を観察するものにとって、行為者個々人の知覚を担う主観の複数性がたやすく経験世界の複数性を帰結すると観念されるような議論となっている。「同一説」には、知覚や説明自体の同一性・公共性を保証するような装置が欠けているのだ。（特権的な）観察者が、行為者が行なう説明の真偽について、それとは「別のどこか」に存在する「真の対象」との関係から判断を下すとするならば、結果として、行為者の経験世界の複数性を帰結してしまうという点で「同一説」と「対応説」には優劣がない。では「対応説」と「同一説」ではいったい何が違ってくるのだろうか。どうしてガーフィンケルは「同一説」を採用するのだろうか。

世俗的推論について語る際にボルナーが言っているのは、実践的には世界の

複数性は、大きな齟齬をきたさず回避されてる、ということである。しかし、これまで見てきたように「対応説」においても「同一説」においても世界の複数性が帰結するようだ。この矛盾はどのようにして解消し得るのだろうか。

実を言えば、「同一説」に世界の複数性という当惑がもたらされるとすれば、それはそこに共通に経験される一つの客観的世界があるという前提図式を密輸入した場合だけである。つまりこの前提を完全に放棄しさえすれば、「同一説」にとっては世界の複数性問題は偽問題であるということになる。この意味で、世界の複数性問題は、成員自身の問題ではなく観察者が自らの前提として「対応説」に立って、行為者と世界との関係を見ることが生み出した偽問題であったのだ。

いま述べたことを再び別の道筋で言いなおしてみよう。観察者として社会学者が人々を扱えば、そこで自分の行なう説明に首位性を与え、他者の行なう説明の妥当性に疑いを差し挟み、皮肉するという意味でのアイロニー⁽¹⁸⁾を生み出す。パーソンズ流の「対応説」の用いるアイロニーは、世界の取り扱いには原理的な複数性を認めながらも、その選択肢のなかで科学者の視点に首位性を与えるというものである。「対応説」においては、原理上、「対象そのもの」について直接知り得ない。更に言えば、対象と説明との距離さえも測り得ない。にもかかわらず、「対応説」はこれまた原理上、科学者の視点が対象に対する最も近接した像を結ぶという仮定を導入する。ここには「対応説」の根底的矛盾が存在している。しかし、ここでは直接この矛盾そのものには触れずに、こうしたアイロニーを水平的アイロニーと呼んでおこう。原理上、同一線上に並ぶ近接像のなかで、科学者の視点が首位性を与えられるという意味だ。

これに対して「知覚された対象が真の対象である」という言い方を、われわれが真に知覚しているものがあるという言い方で他者の主張の妥当性の根拠を皮肉っているのだと見れば、これを垂直的アイロニーと呼んでもよいだろう。例えば、エポケー（現象学的還元）によって、深層の秩序が見えてくるといった話である。初期のガーフィンケルにおいても、エポケーとは別の「判断停止」の手段として「違背実験」を用いて[浜, 1992: 16f.] こうしたアイロニーが用いられていた⁽¹⁹⁾。いずれにしろ「同一説」は、本当は（観察者から見れば）行為者が世界を作り上げているのだという形で部分的にこうしたアイロニーを

用いているようにみえる。

では現在の EM の立場はどちらなのだろうか。「エスノメソドロギー的な研究は、公式化やことの本質についての理論を目指してはいない。そうした事柄は、アイロニーとして行なわれるのなら有効性を持たない」[Garfinkel, 1967a:viii] という文言を素直に受け取れば、EM は水平的アイロニーだけではなく、垂直的なそれをも回避している。現在の EM においては「知覚された対象が真の対象である」というテーゼを遵守しながら、アイロニーは巧妙に回避されている。というのは、成員がその都度、世界の複数性を帰結しないような実践的な解決を行なっているそのこと自体が記述の対象となっているからである。サクセスに帰される EM のスローガンで言われているように「われわれがそれに何も付け加えなくても、世界はすでに構成されたもので満ち満ちている」[Woolgar, 1983:260] のであり、EM は、世界の複数性問題を実践的に解決している姿として立ち現れてくる成員による世界の構成自体を記述の対象とするのである。成員が「同一説」にたっているとする EM は、自らはそれが世界の複数性を帰結する存在論である「対応説」を研究者自身の前提としては宙吊にするという判断停止を行なう。微妙な言い方だが、EM は、「構築的分析」との関係においてはアイロニーを用いているにしろ、成員が「説明可能・報告可能」にしていること自体を記述しているので成員の説明行為と研究者の記述との間にはアイロニーは見られないのだ。

例えば、成員は、現在の知識と不整合である過去における知覚の「真実性」を、あの時は、「そんな気がした」とか「そう信じていた」といった言い回しによって保持している [Pollner, 1975:61]。この記述は、成員が世界の複数性問題を如何に回避するのかを記述の対象にしている。これは科学者が真偽の判断を行なう「対応説」とは別の存在論に基づく探求の道である。ポルナーの記述は、成員が過去においてそれが確かに知識主張であったという事を確保しながら、今それは（少なくともこの場では真理ではないので）知識の主張ではないとすることによって、世界の複数性を回避する姿を記述している。彼の記述は、成員の行なうその都度の主張についての判断を停止して行なわれている。正確に言えばこの判断停止は、すべての主張を知識主張として受け入れるという判断を行なっているということになるだろう。「同一説」と「対応説」で何が違

ってくるのかという先の問いに対する応えがここにある。「対応説」においては、原理上、厳密に言えば、行為者の判断はすべて誤っている。あるいは判断の真偽は観察者としての科学者の判断との一致によって測られる。一方、「同一説」においては「知覚された対象が真の対象である」ので、行為者の判断は定義上誤りえない。EM の用語系で語れば、成員の行なう説明は常に知識主張なのである。そして研究者はこの知識主張という地位をそのまま受け入れる。このように EM においては、成員の説明行為に対しては「同一説」を保持しながら、自らは「対応説」に立たないことで、成員が世界の複数性を問題としていない姿を記述の対象とすることができる。これによって、解決不可能に見える世界の複数性問題そのものとは関わりを持たない探求の足場が確保されることになる。この足場が先に述べたウルガーらの批判の 1 番目、客観主義的二分法の乗り越えの際に効いてくるのだ。次章ではさらに EM の記述対象とは何なのかについて掘り下げていく。

V. エスノメソドロジーにおける相互反映性の多義性

本章においては、EM の提出したいいくつかの重要な概念、特に「相互反映性」(reflexivity)、「信頼」(trust)について概説する。まず、相互反映性を持つ二つの要素 1. 自己言及 2. 循環関係^{(20) (21)}について若干の概念的整理を行なう。次いで、3. コミュニケーションにおける意味確定作業の持つ事後の性格について触れる。ここでは「対応説」的なコミュニケーション観との対比で、「同一説」を成り立たせる特殊な時間感覚の姿が示される。またこの節は「信頼」が成立するということについての予備的考察という色彩を持つ。最後に、4. 「信頼」という概念が EM においてもつ意味が探求される。これは本論文において二重に働いている。一つは、成員一般にとって「信頼」は、論理的には自己言及や循環の関係が見られる社会的相互行為において、そのような痕跡を隠蔽ないしは消去し、対象と説明との疑いなき一対一対応を担保する存在だということであった。一方、「信頼」は研究者にとっては、次節 1 で触れる自己

言及性が時として持つ無限後退の連鎖を中断によって断ち切り研究を研究として妥当させるという性格をもっており、研究方法論としての EM の正当化において臍になっている。これらはすべて、社会構成主義の議論を整理するための在庫調べである。

1. 自己言及としての相互反映性

ここで言う自己言及性、すなわち、自分自身が説明される対象である主体が説明を行なうことは、それぞれレイベリング論と社会構成主義とについて内在的批判を行なったポルナーとウルガーがともに重要視するものである。ここでウルガーとアシュモアが自然科学の社会科学的研究の進展について言及した論文 [Woolgar & Ashmore, 1988:7] から一つの図式を提示してみよう。

この図式の意味するところは、科学についての社会科学的研究はこれまで対象としての科学の営みを相対化してきた (x) から (y) への移行) が、果たして自らを相対化すること (y) から (z) への移行) は可能かという問い掛けである。それはこれまでの文脈から言えば、研究者自身の理論化という構成的作業を明らかにしつつ研究を進めていくことが可能かという問い掛けである。

(x) から (y) への移行において、自然科学を対象として研究する社会学者は、自然科学者が行なっている理論の構成が社会・歴史的な文脈に依存しているということを発見した。しかし、われわれの多くにとって、自然科学は「真の対象」を客観的に扱っているように知覚されている。すなわちこうしてみると、

図－5 科学の社会科学的研究における革新

代表的提唱者	自然科学像	／	科学についての社会科学的研究
(x) マートン (Merton, R. K.)	客観主義者	／	客観主義者
(y) クーン・ブルーア (Kuhn, T. ・ Bloor, D.)	相対化	／	客観主義者
(z) ウルガー	相対化	／	相対化

自然科学者は理論構成に際して、何らかの形で自らの理論化という構成的作業を隠蔽しているということになる。これとまったく同様の理論作業の隠蔽の構成を社会学者が行なっているということ、それ自体を探求に対象にしようというのが (y) から (z) への移行であるということになる。

ガーフィンケルが「EM は探求の対象として日常生活そのものや日常的推論を扱う」[Garfinkel, 1967:1] と言うとき、そこには理論自体が対象となる日常的推論によって構成されているという意味での自己言及性が生じる。一方、図-5 で言えば、(x) あるいは (y) にあたるそれまでの社会学は、対象の地位を相対化することはあっても、自らの地位については客観主義的に取り扱ってきた。「文脈依存性に『注釈』を加え、『修復』し、客観的表現で置き換えることをなりわいとする」[Garfinkel & Sacks, 1970] という EM 以前の社会学に対して、EM においては、客観的表現による科学的記述というメタ言語、またこれについてのメタ言語としての日常言語というパラドキシカルな状況がそこに生じざるを得なくなるのだ。この点でエスノメソドロジーは自己言及性と接点を持つことになる⁽²⁸⁾。また同様に、構成論的視点を徹底化し「因果関係についての言明は社会学者による社会的構築物なのだ」（傍点、原著者）[Spector & Kitsuse, 1977:65=1990:102] とするキツセラにとっても「社会学者が社会（または社会の一部）のメンバーである結果もっている態度や価値や意見が、彼らの専門家としての思考や研究に影響を与えないことを保証する一連の手続きに、その選択肢を翻訳するのは容易ではない」（挿入、原著者）[Spector & Kitsuse, 1977:63.=1990:100] 困難として立ちはだかる。

(z) で示されているように、自らの構成作用を明らかにしつつ理論を構成していくことが如何にして可能になるのか、ウルガーはこれと格闘している。そしてこうした問い掛けに対する「解答」が EM に期待されているのだ。その後のウルガーの歩み [Woolgar, 1988a] から考えれば、「OG 論文」でウルガーが行なった主張の真意も、ここにあると思われる。

また、ウルガーらの批判が EM にも当てはまるとすれば、それはまさに EM がこの自己言及性という問題を蔑ろにし、自らの理論の構成作用を隠蔽している可能性があるという点であろう。ポルナー [Pollner, 1991] も言うように、現実にはこうした自己言及としての相互反映性に対する関心は、現在の EM 研

究では傍流に追いやられていると言ってよいだろう。

2. 循環関係としての相互反映性

循環関係としての相互反映性は、非・対応説的な世界観の根幹をなすものである。これまでの例にしたがって単純化して言えば、説明とは対象についての説明でしかありえないが、説明行為なくして対象の存在もありえないという循環こそが、循環としての相互反映性である。この点を考慮に入れると、厳格な社会構成主義が「真の対象」「について」の認定を行なっているか否かという「存在論上の恣意的線引」をめぐる論戦の争点自体が、かなり客観主義的な対象観の中での争いであるということになる。

また EM でよく用いられる例で言えば、循環関係としての相互反映性は論文の題目ともなっている「解釈のドキュメンタリー的方法」[Garfinkel, 1967b]にその姿が示されている。ここでは、該当部分を抜きだすことで循環関係の存在を示すことにする。

理解を進めるとは、現に行なわれた言語的な出来事を、この出来事の根底にある基本パターン (underlying pattern) 「のドキュメント」として、あるいはこの基本パターンを「指し示しているもの」として、またそれを基本パターンの代表的な事例として取り扱うことに他ならない。…また、基本パターンは、一連のドキュメンタリーという証拠から推定されるだけでなく、翻って、そのドキュメンタリーという証拠自体が、基本パターンについて「すでに知られていた」り、知ることができそうなことに基づいて解釈されている。つまり、ドキュメンタリーとしての証拠と基本パターンは、それぞれが互いに他を精緻化し合うために使われていたのである。[Garfinkel, 1964:39f.=1987:40]

こうした循環ないしは相互依存関係は、そのような眼でみれば、そこかしこに遍在している。知覚を例に挙げて、再度説明を試みよう。対象は知覚によって構成されるのだが、知覚とは常に「なにものか」についての知覚でしかありえない。つまり、知覚が可能だとすれば、それは対象と知覚とが、互いが互いの

根拠となるという形でしかありえないことになる。現象学におけるノエマとノエシスとの関係にも当てはまるこの宙に浮いたような無根拠さは、厳格な社会構成主義につき付けられた疑問（状態に頼らず定義について語ることは可能か）と同様に解決不可能にも見えるジレンマをわれわれの眼前に差し出している。

ではここで、この循環の無根拠さと実在性を「標準化」を例にとって示してみることしよう。おおよそ「誰にとっても認知可能＝標準化された」世界に対する EM の態度は全く両極端にあるように見える。というのはガーフィンケルの論考 [Garfinkel, 1967] においては、「標準化」は徹底して疑いの対象であるにも関わらず、最近の会話分析 [山崎 他, 1993] にとっては「標準化」が自明の前提にされているように見えるからである。この二つの「標準化」は全く異なったものなのだろうか

ガーフィンケルは、社会学者が共通理解が「標準化」されていると言うとき、そこでは実際「標準化」の妥当性を循環的に作り上げていると言う。すなわち「（認識に際して標準化を用いるという）当のこの行為によって、標準化というものが発見され、生成され、保持される」（挿入、引用者）[Garfinkel, 1964:67=1989:76] と言う。この循環によって、成員から見れば、場の属性とは独立した「真の対象」を共有しているように知覚されるということが起こる。EM 以前の社会学においては社会学者もこの知覚を共有していた。しかし、以下にも示されるように、「標準化」は現象なのである。

- (a) 日常的活動は、分析によれば、均一性、再構成可能性、反復性、標準性、典型性といった特性を示し、
- (b) 以上の特質は特定の産出群とは独立して存在し、
- (c) 特定群からの独立性は、成員による認識にとって一つの現象であり、
- (d) 以上の (a)(b)(c) という現象は、どの特定群にとっても実践的でそれぞれの状況のもとで成し遂げられる達成なのだ。

[Garfinkel & Sacks, 1970:346]

ここでは引用文中の (a)(b) によって成員の共有する「対応説」的な世界の客観性・実在性が提示され、(c)(d) によってそれを成員が構成する現象であると

する「同一説」的な見方が示されている。これらが循環的に支え合い、結果として出現するのは、強固な「標準化」である。その姿は、後のサックスの文献 [Sacks, 1972a] [Sacks, 1972b=1989:107] における徹底的に客観主義化されたとも見える「標準化」としてあらわれる。以前のガーフィンケルが「結果を見なくても改めるべき本質的不整合を含んでいる」 [Garfinkel, 1964:67=1989:76] とまで、批判していた「標準化」をはるかに上回る強固な「標準化」がそこには姿を現す。そこ [Sacks, 1972b:37=1989:107] では、対関係が「標準化されている」ということが、

- (1) 任意の成員 X について、もし x が他の成員 Y との対関係における自分の位置を知っているならば、そのとき X は X 自身との対関係における Y の位置をも知っている。X もまた、もし Y が X との対関係における Y 自身の位置を知っているならば、その時 Y は Y 自身との対関係における X の位置をも知っているということをも知っている。
- (2) 任意の (X でも Y でもない) 成員 Z について、もし、X が Y との対関係における X 自身の位置をどういふものとみなしているかを Z が知っているなら、X が、X 自身との対関係における Y の位置をどういふものとみなしているかをも Z は知っている。さらに、X はまた、もし Y が X が Y との対関係における Y 自身の位置を知っているなら、そのとき Y は Y 自身と同じ対関係における X の位置をも知っている、と考えている、ということをも Z は知っている。またさらに、X と Y がそれぞれとの対関係におけるそれぞれの位置について一致した見解を持つとき、X と Y の間で成立する権利・義務関係のなんたるかをも、Z は、X と Y と同じように知っている。

として示される。

このように「標準化」の実在性を悉きに見ていくことで明らかになるのは、成員にとっては、自己言及性も循環関係も、実践的にはすでにその都度、解決されているように見えるということである。そして、説明行為なくして対象の存在はありえないということが「世俗的な存在論」に浸っている行為者当人にとっては徹底的に隠蔽されていることだ。このようにして「赤ん坊を抱き上げ

ているのはその子の母親である」といったような知覚が相互反動的に強固に「標準化」された形で現象として作り上げられながら [Sacks, 1972a]、場の属性とは独立した根拠を持つものとして知覚されていくのである。すなわち、結果として会話分析に顕著に表れるように EM が見せてくれるのは、自己言及あるいは循環の無根拠さというより世界の実践的な実在性であり、底堅さなのだ。EM の中心的課題は、成員が実践的にこうした困難を乗り越える、あるいは困難の存在を認めなくても生きていける姿、これを明らかにすることであったとも言える。後続する二つの節で扱う「意味確定の事後的性格」と「信頼」はこうした困難さを隠蔽する方向で作用する。

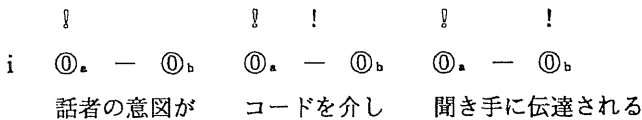
社会構成主義との関連で言えば、循環関係として相互反映性を見ていくことで明らかになったのは、広義の現象学的知見を取り入れて、この意味で厳密に言えば、説明は単純に対象に「ついて」の説明ではありえず、常に対象の構成を伴うということである。それゆえ、厳格派が言うように単純に「われわれは状態ではなくして定義を探究の対象にする」ということが、一種の物象化の産物であり、きわめて困難な課題設定であることが明らかにされた。しかしまた、そうした困難さを超えて、社会構成主義には「成員が説明を相互反映性 にもかわらず／のおかげで、現象として成り立たせていく姿」という EM 的な記述の対象が残されているということも明らかになった。それは「(EM 的研究の) 最も優れた点は、場面を説明・可能にするために成員が用いる手続きこそが、その場面を組織だった日常の出来事として生み出し維持している活動であると考えerということである。説明行為と説明のもつ『相互反映性』あるいは『受肉化 (incarnate) 』といった性格こそが、この (EM のもつ) 長所なのなかでも特に重要な点を作り出してくれる」(挿入、引用者) [Garfinkel, 1967a:1] からである。

次節においては、こうした自己言及性や循環といった原理上の困難を成員が実践的に如何にして解決しているのか、その機序をコミュニケーションを例にとって述べていく。

3. コミュニケーションにおける意味確定の事後的性格

EMの若手の理論家であるボーゲンは、EMのコミュニケーション観がそれ以前の社会学によって共有されていたそれとは根本的に異なったものであるという。旧来のコミュニケーション観は、一括してソシユールのなそれと呼べるもの[Bogen, 1992a, 1992b → 1993]であった⁽²³⁾。これを図示すれば、モデル図のようになる。これは話者の意図が、コードを介して、聞き手に伝達されるという図式である。この図式における関心の中心は、話者と聞き手との「意味の一致」ということになる。コミュニケーションの結果の成否はこうした「一致」によって測られる。

図ー6 ソシユールの、非・エスノメソドロジー的コミュニケーション観



凡例：① = 成員 ⌋ = 話者の意図 — = コード

これに対して、EMにおいては、頭のなかの観念⁽²⁴⁾の「一致」ではなく、常に事後的な意味の確定作業が行なわれ続けることにこそコミュニケーションの本質を見ることになる。ポルナーはコミュニケーション（トーク）が持つこうした事後的性質の例として、以下のようなものを挙げる。「『お名前は何といますか』といった問い掛けをすれば、応えを待つことになる。脱・対象化の態度という条件に従うなら、応えがなかった場合、このことから、少なくとも相手にとっては、問い掛け自体がなかったということになる」[Pollner, 1978:284] すなわち実践的には、応えの存在が問いかけの存在を対象として成立させているというのだ。このような意味の事後的確定と実践的合意をコミュ

ニケーションの本質としてみる見方をモデルiiと呼んでおく。但し、意味の確定作業はその都度完結しているのであるから、ここで確定が行なわれ続けると言うのは、決して未定－確定という連鎖でなく、確定－再確定という連鎖である。当事者にとってこうした再確定がそれまで未定だったものが確定されているとして知覚されるというのは言うまでもないだろう。知覚がその都度辻褃が合うものとして構成され直していくのは、時計の針の動きとは別の時間的パラメーターがそこに働いているからである。そうした「『語られた事柄』を構成するものとしての時間の役割は、(つまり)この事柄を作り上げる一連の行為を通じて展開し続けながら、それを展開し終えていく出来事として構成していく時間の役割は、…両当事者によって、それぞれ自分にとっての意味も相手にとってのそれも、このような会話の内部の展開からしか知ることができない」[Garfinkel, 1967b:40=1987:39f.]。このように考えていくと、事後的・予期的にその都度の「合意」を生み出す能力がわれわれには備わっていると考えることになる。

ところで、モデルiiでは観察者は社会的に妥当とされている規則や知識の束に従って、発話の意味を解釈することになる。しかし、規則や知識に従うということは決してアルゴリズムではない。こうした規則に対する従い方は原理的には如何ようにも可能なのである⁽²⁵⁾。また「合意」は常にそこでの実践的な目的に応じた「合意」であり、それ以上でもそれ以下でもない。この立場から見れば、その都度、実践的に成し遂げられる合意を超えてモデルiによって想定される、「『意味の一致』という観念は、『合意』と『合意だと思うこと』の区別が機会に応じてなされる姿を物象化したもの」[Bogen, 1992b → 1993:66]である。また、そうした「一致」が原理上不可能であることは、「一致」を言うためには、一段下がって「一致」しているかどうかを測る物差しと基になるものとの一致を測らなければならないという無限後退が待ちうけていることから明らかである。この批判は「対応説」が対象と説明との「一致」によってその真偽を決定しようとする事への批判としても妥当する。つまり、コミュニケーションにおいては端的に実践的な「合意」の成立を基準にするしか道は残されていないのである。

実践的な「合意」の成立、すなわち当事者の知覚から見れば、意味の確定作

業がコミュニケーションの要諦であって、その逆ではない。EMの眼から見れば、モデルiiのように確定作業を経ているはずの実践的「合意」に基づく現実のコミュニケーションが、「意味の一致」に基づくモデルiとして知覚されるということのなかに、事後的・遡及的な意味確定作業の隠蔽という性格を読み取ることになる。これに対して「対応説」的なコミュニケーション研究は、話者あるいは研究者が「意味の一致」の判定者であることから、他の社会の成員を一種の判断力喪失者としてみる。「研究者の指示に従って解釈者が行為するように仕向ける。これによって研究者は成員自身の方法を研究者が想定しているとおりの方法として研究することができるようになる」[Garfinkel, 1967b:70=1989:80]というように、この立場は研究者に特権性を付与し、それ以外のすべての判断を誤りとして切り捨てることができるようなものである。研究者によるこうした裁定はまさに「対応説」的な存在論によって根拠を与えられているものである。

本来、記述的なコミュニケーション研究に求められるのは、成員の言語ゲームとは何かを問うことである⁽²⁶⁾。研究者の分析概念によって事象を切り取るのではなく、事象を成員がモデルiに基づいているとして示し合う際の、ヴァナキュラーな概念を用いた様々な行為といったものを扱う必要があるということだ。あるいは、研究の方向を「当初は説明という手続きを用いることによってリアリティを構成したはずのものが、結果としてそこにあったものの単なる報告や反映とみなされるようになる」（傍点、原著者）[Woolgar, 1981:246]すなわち、モデルiiをモデルiとして知覚できるようにするために互いに協調して行なっている行為の複雑性を、都合よく単純化せずに、理解可能な複雑性として扱うという方向に転換することが求められている。こうしたコミュニケーション観、あるいはコミュニケーション研究の方向性は、厳格な社会構成主義のいう「成員が行なう対象の記述の記述という研究方針」[Kitsuse & Schneider, 1989:xiii]に多くの示唆を与えるものである。

4. 相互反映性と信頼について

本節においては、エトセトラ条項 (*et cetera* clause) との関連で EM のキー概念の一つである「信頼」について考えていく。ここでの主張は、「信頼」がエトセトラ条項が働くこと、あるいは事後的・遡及的な意味確定作業として特徴づけられるということである。また、エトセトラ条項の存在とは事後的・遡及的な意味確定作業とその隠蔽そのものであることから、ここでもまた EM における事後的な意味確定作業の首位性を主張することになる。

エトセトラ条項は、特殊な時間感覚に基づく、通常の談話の見られてはいるが気づかれない背後基盤として以下のように語られる。

通常の談話の特性として認められていることは、相手が理解してくれ
るという予期、表現が機会的であるということ、言及対象というもの
がもつ特有の曖昧さ、そこで言われたことの意味を正しく知るために
は、先々に何が語られるかを待たねばならないといった意味での現在
の出来事のもつ事後的・予期的な意味合いといったものである。これ
らが、通常の談話の背後基盤である見られてはいるが気付かれていな
い (seen but unnoticed) 特性として働いている。それによって、あり
ふれた・筋の通った・理解可能な・わかりきった出来事として、実際
の発話が認知される。(傍点、原著者) [Garfinkel, 1964=1989:41]

ここで注意を促しておきたいのは、エトセトラ条項はいつも働いていて、隠
されていて、見え姿と「真の対象との一致」といった通常さを支えているとい
うことだ。他所でも語られているこういった諸条項 [Garfinkel, 1967b:89-92] を
メーハンとウッド [Mehan & Wood, 1975:115] は、3つの手続きとして取り扱っ
ている。(1) 不明確な情報を咎めだてしない。(2) インデキシカルな表現の曖
昧さの埋合わせをする。(3) 予期的・事後的な次元の3つである⁽²⁷⁾。

しかし、ここに奇妙な捻れが見て取れる。と言うのは、厳密に見れば順序と
して(2)と(3)があって初めて(1)が成り立つはずであるからだ。事後的・遡及
的に行なわれる埋合わせ、修復が、そこでは意味がインデキシカルな曖昧さを
持っていたということを認定するのだ。つまり(2)、(3)が行なわれないのな

らば、(1)で「素通り」させた情報は決して不正確な（インデキシカルな曖昧さを持つ）情報ではない。そして、(2)、(3)すなわち、事後的な意味の確定作業によって情報はその時点で不正確ではなくなる。逆説的な言い方を許してもらえば、エトセトラ条項が働けばそこでは表現は不正確ではなくなるし、エトセトラ条項が働かないのならば、そこでもまた表現は不正確ではなかったということになる。エトセトラ条項が働くという前提において日常生活には、問題化するほど不正確な表現などないということになる。

エトセトラ条項が働くことで、見え姿と「真の対象」との関係が問題化しないことを総体として心的過程として見た場合、そこに「信頼」という言葉が割り当てられる。ガーフィンケルにおいて「信頼」とは、例えば、ゲームの競技者ならば、

- (1) ゲームをする領域、競技者の数、手番の順序などについて、ありえるいくつかの選択肢から、競技者の観点から見えてくるある一組の選択肢を括りだす。この一組の選択肢は、競技者自身の願望や環境、計画、関心、あるいはその選択が彼自身や相手に与える結果とは全く無関係に、競技者が期待し、選択しているものである。
- (2) 競技者は、そのような一組の全く同じ選択肢が、自分にとって拘束的であるように、他の競技者にとっても拘束的であると期待する。
- (3) 競技者は、自分が相手に上述のことを期待するようにして、他の競技者もそれを自分に期待していることを期待する。

これら三つの特徴を構成的期待 (constitutive expectancies) と呼ぶ。

[Garfinkel, 1963:190]

というように「相互主観的な環境の取り扱いが構成的期待によって賄われていることをいう」[Garfinkel, 1963:193]

それは端的に、見え姿と「真の対象」との間に疑いなき対応関係が生み出されていることである。「信頼」自体は「見られてはいるが気付かれてはいない」ようなもののなのである。それは、見え姿と「真の対象」との間に疑いなき対応関係が生み出していることから研究者によって遡って発見されるものになっている。エトセトラ条項との関係で言えば、「信頼」とは、そこにそれがあるか

らエトセトラ条項が機能するという因果説明的に語られるより、エトセトラ条項が機能した場面から遡って、事後的にそこに「信頼」があったということが認定されるとして語られるべきものであるというわけだ。

結論的に言ってしまうと、「日常生活の態度」に遍在し、作動するエトセトラ条項こそが「信頼」概念の要諦であるということになる。特殊な時間感覚に支えられた事後的・遡及的な意味確定作業によって、自己言及性や循環の存在が徹底的に隠蔽され、成員の「対応説」である「世俗的推論」が問題のない自明なものとして機能する。研究者の目から発見可能なエトセトラ条項が成員にとっては「見られてはいるが気付かれてはいない」ことが重要である。現実が相互反映性や事後的・遡及的な作業といった「行ったり来たり」によって作り上げられていることを「信頼」が隠蔽しているのである。

ところで、「信頼」は、それ自体が EM 的研究を成り立たせる概念でもある。というのは、第一節で挙げた自己言及の生み出す悪循環を断ち切る要素がこの「信頼」であるからだ。「日常生活の態度」がこの「信頼」によって成り立つということ、すなわち、何らかの秩序形成能力が前提となって実践的行為が語られるということは、翻って、自己言及性が生み出すかもしれない無限後退が実践的にはその都度において断ち切られているということでもある。成員が無限後退を生み出さないようにして研究においても無限後退という悪無限を生み出さないという立場が成員がエトセトラ条項を機能させるという意味での「信頼」によって可能になる⁽²⁸⁾のである。「社会学者が定義過程で他の参加者から科学者として取り扱われ、利害関心と偏見とを持たない専門家としての特別の地位を与えられるかどうかは、一概には答えられないプロブレマティクかつ経験的な問い」（傍点、原著者）[Spector & Kitsuse, 1977 : 70 = 1990:109] である。ある場合、自己言及性が生み出すはずの無限後退が無視され、それは客観性を与えられ、またある場合には自己言及性のゆえに社会学者のクレイムは単なる一つの信念として切り捨てられることになる。これらはあくまで実践的な「合意」あるいは「信頼」の問題であるということになる。

最後にこれまでの論点を纏めよう。EM において成員が「同一説」を生きているとは、相互反映的な対象の構成、すなわち説明行為によって世界が作り出されるということである。「信頼」の存在、あるいはエトセトラ条項の事後

的作動によって、構成作業は隠蔽 (mask) され、成員自身は「対応説」の世界に生きていてと観念している。「対応説」的世界の確証は、実践的コミュニケーションにおいては、その都度「合意」として行なわれる。EM は、自らは「対応説」に立たないことで、成員が説明・報告しているこの姿を記述する。本章では、「相互反映性」「信頼」といったものを、これら貫くレトロスペクティブな矢印をキーとして見ていく⁽²⁹⁾ことで、EM 像が単純化できることが示し得たと思う。

VI. おわりに、あるいは医療化をどのように考えるか

ウルガーらの「存在論上の恣意的線引」の批判が成り立つのは、研究者と成員の対立を、研究者は状態について客観的に知っている／成員はそれについて客観的には知らないという対立として捉える場合である。と言うのは、成員が状態について十分正しく知っているとするならば、こうした二分法は立て得ないし、もし研究者が成員の行なう線引に従って線引を行なうなら、それを恣意的とする基準もなくなってしまうからである。

これまで述べてきたことで明かなように、EM の眼から見ると、成員の知識とその記述との関係は、成員は状態について実践的に知っている（身体的知識として非・命題的に知っていること、あるいは、成員が常に「知識主張」を行なっているということを、ここでは知っていると表記している）／研究者はそれに依存して成員の知っている姿を知っている⁽⁸⁰⁾ということになる。すなわち EM の記述の対象は、

説明・可能な現象である。すなわちそれは (a) 成員が遂行している現象であり (b) 成員によって観察可能である。そして (c) 成員がそうした現象を生み出し、それを観察しているという点で、それは報告可能なのである⁽⁸¹⁾。[Garfinkel & Sacks, 1970:351]

というように成員がすでによく知っているものなのである。EM の研究対象

となる世界とは、われわれがそれに何も付け加える必要もないほどすでに構成され尽くしている世界なのだ。成員の「記述を記述する」というEMの立場に立てば、「存在論上の恣意的線引」という非難に煩わされずに定義を扱うということが可能である。厳密に言えばそれは、定義を扱うというより定義という行為を扱うという立場である。実はこれは以下に示されるようにキツセにとっては[Spector & Kitsuse, 1977=1990]で示された自分たちの立場そのものである。

われわれは、社会問題における社会の状態の意味はメンバー／参加者がそれをいかに構築するかに依存しているということを方法論的に指摘することを狙っていた。したがって、ウールガーとポーラッチが論じたように、社会学研究者がすでに存在する歴史的な状態とみなすものとメンバー／参加者による状態の「発見」とのあいだの不一致が「存在論的なごまかし (ontological gerrymandering)」を構成するわけではない。そうではなく、メンバー／参加者による社会の状態についての想定と、その状態が問題であるという彼らの定義が、研究者にとって、ある現象を社会問題の研究対象とみなす契機となるのである。

(傍点、原著者) [Spector & Kitsuse, 1987=1990:275]

キツセから見れば、ウールガーらはこの点を誤解していたということになる。

ウールガーらの「存在論上の恣意的線引」への批判は二段構えになっていた。客観主義的二分法への批判と研究の自己言及性への問い掛けであった。後者は、研究者の行なう構成的作業の隠蔽・理論化の対象の選択における恣意性といった問題をも含むものとなっている。後者の視点の含意を真面目に受け取れば「記述の記述」といった瞬間、まさにそこに自己言及性が生じるということになる。自らが記述の対象に含まれるということになるからである。

より具体的に言っても、広い意味で研究対象の選択がどのようにして行なわれるのかについて、「記述の記述」というプログラム自体が理論内在的に何らかの指針を示してくれてはいない。これは社会構成主義と同様[水津, 1992:113]、EMにも当てはまる問題提起である。EMの内部でも立場が別れる部分であろう。この意味でウールガーらの批判はEMに当てはめた場合にも、

少なくとも部分的には、妥当するものになっている。EMの個別的研究がいったいどんな基準でその研究対象・記述対象を選択しているのかということは、EMの理論内在的に答えが得られるものだとは思われないからである。

この点で、本論文では矢印の複数性あるいは客観主義的二分法の問題として定式化したウルガーらの「(恒常的な)行動や状態とそれに対する人々の反応との『不一致』」をキツセが「どのようにして調査研究の対象となる問題が社会学の前にたち現れるのかについての記述としてはきわめて適切かもしれない」[Kitsuse, 1987=1990:276]と言い、「問題が問題として現れてくるさまを描く必要がある」⁽⁸²⁾と言うとき、社会構成主義にとってと同様、EMにとってもウルガーらの提起した問題の大きさが明らかになる。

手短にこれまでの議論を振り返ってみよう。極端に単純化した形で議論の流れを示すことにする。定義における矢印の複数性と逆転として特徴づけられる社会構成主義は、客観主義的二分法の指摘と自己言及的視点に基づくその不可能性の問いとして特徴づけられる「存在論上の恣意的線引」という論難を受けた。矢印の複数性と客観主義的二分法とは平行関係にあった。EMの「記述の記述」というプログラムは、成員の現実の構成作業(相互反映性)とその隠蔽(信頼)をそのまま受け入れる「同一説」に基づくことによって可能となったものであった。EMのプログラムを受け入れ、社会構成主義の特徴の一つであった説明という矢印の逆転(対象の構成という視点)を徹底することで、矢印の複数性問題ひいては客観主義的二分法という論難を無効化する道が開かれた。しかし、もう一方の論難である理論化という作業のもつ自己言及的性格の生み出す困難さに関しては決定的な回答は得られなかった。ただ論理的に生じる、自己言及性に由来する無限後退を実践的に中断する「信頼」あるいは「実践的合意」というものの存在が本論文での暫定的回答である。

最後に、応用問題として、医療化研究における社会構成主義の今後について考えてみたい。社会構成主義に基づく研究の一例として、医療化研究についての一連の論争[Strong, 1979][Conrad & Schneider, 1980b][Bury, 1986][King, 1987]を取り上げてみよう。

定義が変わることで病気として取り扱われる対象が変わってきたという視点を研究方針として採用したのが、社会構成主義の医療化研究であった。統制が

逸脱を生み出すというレイベリング論の基本的な図式が、医療という社会統制機構についても妥当すると考えるのである。

ビュリは、医療の世界が決して中立的ではないことを指摘したフリードソン (Friedson, E.) を受けて、「医療における社会構成主義は、こうした視点を医学にかかわる知識や医療実践の内部にまで適用した」 [Bury, 1986:139] という。彼に従えば、医療における社会構成主義の主張は次の五つから成り立っている。

- (1) 医学的知識を問題性を有するものとして扱い、分析の対象にすること
- (2) 医療実践だけでなく、医学的知識も社会関係との関わりによって構成されているものだということ
- (3) 技術的領域でさえも中立的だとみなし得ないこと
- (4) 疾病の発見でさえも社会的出来事であり、社会的文脈の中で起こること
- (5) 医学史における単線的発展ないしは「物語」は疑わしいということ

[Bury, 1986:140-147]

こうした説明自体は、主に、社会構成主義の持つ一側面、すなわち、これまでの用語で言えば、説明・定義の矢印の複数性を言い表わしている。本論文においては、社会構成主義を、矢印の複数性と逆転（レイベリング論的転回）が融合したものとして特徴づけた。

しかし、こうした社会構成主義の姿に対して、ビュリは、「社会構成主義が、自らにとって都合のよい側面を過度に強調し、一般化し、経験的研究の複雑性を無視して傲慢な態度をとっている」 [Bury, 1986] と言う。同様な調子で、キングは、データから見ると社会構成主義の行なう説明は、不適切だと結論づけ、「社会構成主義の説明は信頼性を欠いている、あるいは少なくとも、競合する他の解釈と同じくらいの信頼性しかない」 [King, 1987] と言う。また、ストロングは、医療化という言説が社会学的帝国主義の産物であり、現実には、医療化として名指されるようなことは起こっていないと言う。より厳密に言えば、「少なくとも臨床の現場において起こっている変化は、声高に叫ばれているよ

うな劇的なそれではない」[Strong, 1979]と言う。

ストロングのこの批判に対して、コンラッドとシュナイダーは、医療化のレベルを医者－患者間の臨床、医療制度および技術、実験科学を含めた医学理論・概念と三つに区分し、少なくとも概念、あるいは理論のレベルでは医療化は起こったのだ[Conrad & Schneider, 1980b]と言う。だがこうした答え方は、自らの主張の妥当する範囲を限定しており、その限りにおいては正しい答え方をしているように思われる。疾病像には明らかに変化が見られ、疾病についての理論や科学技術の「進歩」に伴い技術的処置の可能性に変化が見られることは誰も疑うことができないように見えるからだ。

しかし、社会構成主義が、その内部での理論的不整合に対して、何らかの対策を施そうとするなら、こうした答えはまだ不十分な答えでしかない。こうした不整合をEMの知見の取り入れた再構成によって取りのぞいていこうとすれば[中河, 1992:58]、むしろそうした問い自体を引き受けないという態度が望まれる。それはビュリによって非難される「一般化」を差し控え、キングの言うような「信頼性をめぐる争い」を避け、ストロングの言うような「客観的状态にかかわる争い」を行なわない方向である。すなわち、ここで批判されている医療化についての社会構成主義は、その論理構成がウルガーらの批判がそのまま当てはまるようなものになっているという点で共通している。それは、生物学的実在性を根拠に一つの事実をめぐる多様な解釈の間の争いを行なう、あるいは客観主義的にその姿を描くという形式を共有しているということである。それゆえ、キングが言うのとは異なった意味においてはあがあるが、今後の社会構成主義にもとづく医療化研究は「より精緻化された試みとして」[King, 1987:372]行なわれる必要があるのだ。EM的な医療化研究として。

<註>

- (1) 社会構成主義 (Social Constructionism) という同一の呼ばれ方をする学派が科学社会学、情緒社会学にも存在する。このうち特に科学社会学における社会構成主義と EM との関係については [椎野, 1989] を参照せよ。
- (2) 最近、キツセらの新たな展開とそれについてのコメントを中心とした論文集 [Miller & Holstein, 1993] が出版された。この論文集の存在については、1993 年 5 月「教育問題」研究会【代表：山村賢明】において、キツセから直接知らされた。次の機会には、この論文集における展開を射程に入れた論究を行ないたい。
- (3) これについては [中河, 1989]、[鮎川, 1992] の整理が有用である。ここでは [Kitsuse & Schneider, 1989:xi-xii] にしたがって、本文とは別の角度から簡単に文脈派と厳格派の違いについておさらいしておこう。文脈派は、研究者が自らの専門的知識に基づいて成員の常識的信念や理解に評価を加えることを、専門家としての社会学者にとっての義務である、と考える。一方、厳格派は、こうした成員の信念等についての評価が容易に客観主義にいきつくとして、自らの研究対象を成員の活動の記述に限定していく。
- (4) この特徴づけは過度の単純化に見えるかもしれない。例えば「統制の弛緩→逸脱」というコントロール・セオリーに目配りがされていないと感ぜられるかもしれない。しかし、現在から遡って見れば、統制⇒逸脱という視角、すなわち「逸脱現象においては、統制する側の存在、サンクションの発動は、…本質的構成要件をなす」[大村 & 宝月, 1979:2] という視角の発見こそが、今日の社会構成主義の理論が形成される上での決定的な「転回」であったのだ。こうした点で、「<統制の強化→逸脱>という一見パラドキシカルな図式」[大村 & 宝月, 1979:3] の採用を、ここでは「レイベリング論的転回」と呼ぶ。
- 但し、レイベリング論的転回によって、<統制の強化→逸脱>が「統制なくして逸脱なし」として構成論的に徹底されたわけではない。4 章で触れられる統制⇔逸脱（説明⇔対象）という方向への一元化・構成論的視点への徹底化は、逸脱に限らず、すべての説明行為について EM においてこれと平行して行なわれていた。
- (5) 本論文では、図式中の対立する二項としてそれぞれ説明と定義、対象と状態を同義語として用いていく。但し、社会構成主義の文脈においては定義と状態という対が、EM の文脈においては説明と対象という対が主に用いられる。
- (6) 「鏡」という比喻の含意については、[Rorty, 1979=1993] を参照のこと。

- (7) 社会構成主義の認識図式の特徴づけと表記法については [Woolgar,1983] を参考にした。なおそこでは図式中の二項はそれぞれ説明（ドキュメント）とリアリティ（基本パターン）として扱われている。
- (8) 脱構築主義者にとっては、矢印の複数性の存在とその方向の逆転は支配的な物語の特権性を無効化するために用いられることになる。日本では 1980 年代前半に爆発的に起こったような脱構築主義あるいはポスト・モダンといった方向への興味・関心がアメリカにおいては現在、シンボリック・インタラクショニズム学会に属しているような人々の間で、巻き起こっているとライマン (Lyman, S.) は言う。【1992 年 8 月、シンボリック・インタラクショニズム学会 於 ピッツバーグでの個人的応答】による。
- (9) この図において矢印の複数性は社会・歴史的な諸力によって媒介されている。複数の矢印すなわち説明可能性の背後には、多様な認識・関心を生み出すものとして常に、力といったものが想定される。
- (10) この規準によって、①にあたる文脈派の社会構成主義と②にあたる厳格派の社会構成主義とが区分されると言うことも可能だろう。
- (11) この纏めは [中河, 1990:57] による。但し私見では先に客観主義的二分法として特徴づけたこの点より、こうした客観主義的二分法が果たして可能なかという問題意識に基づいて分析家の隠蔽作用自体を明らかにするという点がウルガーらの行なった「アーギュメントのエスノグラフィー」の目的であったと考えられる。
- (12) EM においても、「実践的推論は、いわば、特定の観察可能な行為でありながら、そのようなものとして観察されない。不思議な地位を与えられているのである」[樫村, 1988:103-4]。このように樫村は、シュッツ理論で言う「匿名性」が、「外面化」ないしは「行動化」したものとして実践的推論の持つこうした＜特定の・つまらぬものと・みなされている＞性格を特徴づける。また [浜, 1992:18] によれば、エスノメソドロジーの対象の選定と科学観には以下のような特徴がある。
- ガーフィンケルのエスノメソドロジーは、シュッツと同じ対象、すなわち「見られてはいるけれども気づかれていない」人間の物象化作用を、パーソンズと共通の科学観に立って、観察者の観点から解明しようとするところに成立したものだといえる。
- (13) ガーフィンケルの博士論文における立場は、[浜, 1992]、[樫村, 1988]、[山崎, 1991] に紹介がある。
- (14) ここでは科学的方法が対象への近似という点で優位性をもつという主張に力点を置いたが、社会科学的研究の場合は、これに加えて研究者と研究対象との主観の間

の構造的同一性の仮定が、理論の妥当性を有無を言わせぬものになっている。〔山崎，1991〕を参照せよ。

- (15) 言葉としてはよく知られているが、これまで日本においては解釈が一定してこなかった「エスノメソドロジ的無関心」をガーフィンケルとサックスは以下のように定義づけている。

形式的構造についてのエスノメソドロジ的な研究は、…それがどこで誰によって行なわれたものでも、その妥当性、価値、重要性、必要性、実用性、成功、結果といったことについてのあらゆる判断を差し控えながら、成員による形式的構造の説明を記述することをめざす。われわれはこうした手続き上の方針を「エスノメソドロジ的無関心」〔Garfinkel & Sacks, 1970:345〕と呼ぶ。

またこの意味するところについては〔山崎，1993:333-42〕を参照せよ。

- (16) ガーフィンケルの物象化については〔浜，1992:11-2〕を参照せよ。
- (17) 「同一説」と「対応説」についての説明においては行為者／観察者を、EMの文脈においては成員と研究者という術語を用いる。但し、この用語系においては、基本的には研究者も成員に含まれる。
- (18) ここでいうアイロニーには二重の意味が込められている。あれは間違っていて、これは正しいという言い方自体をアイロニーを用いていると呼ぶとともに、その根拠の危うさもアイロニーと呼んでいる。
- (19) ガーフィンケルには、パーソンズは、社会秩序を表層 (awareness) のレベルで扱っており、それに対し自分はシュツにならって深層 (perception) のレベルで社会秩序を扱うという発想が、博士論文の当時には見られる。これについては〔樫田，1991a〕を参照せよ。これに対して、ガーフィンケルは現在では「EMは伝統的な社会科学と言い争いなどしないと主張する。彼が言うには、EMと伝統的社会科学とは、(決定的に) 深いところで異なっているので、同じ生態学的地位を巡って競い合うようなことはない」〔Watson & Seiler, 1992:xxv〕という立場に立つ。すなわち、「同一説」は「対応説」の基礎付けをするという垂直的な立場を捨て、「対応説」・「構築的分析」は「エスノメソドロジ的無関心」の対象になったのである。
- (20) アッシュモア〔Ashmore, 1989:32〕は、相互反映性を反省 (self-awareness)、自己言及 (self-reference)、説明の構成的循環 (the constitutive circularity of accounts) の三種類に区分する。またこのうち、三番目の循環をEMにおける相互反映性であるという。本論文における相互反映性の分類は基本的にこれに依拠したものである。
- (21) ポルナー〔Pollner, 1991:372〕は、相互反映性を内生的 (endogenous) なそれと根源的・(自己)言及的 (radical-referential) なそれとに分類し、会話分析に代表される最近

の EM は、ガーフィンケルを含めて後者の重要性を蔑ろにしていると言う。前註と関連づけて言えば、ここで内生的相互反映性といわれているのはアシュモアが EM 的と呼び、説明の構成的循環と呼んだものに対応する。またそれとは別に自己言及的な相互反映性があるという点で両者は一致している。またボルナーは、会話分析の流れに首肯しきれない自らの立場を、一種のロマンチストと呼ぶ。【1993 年、第四回国際プラグマティスト学会 於神戸】での発表による。

- (22) シュッツの「視界の相互性」に由来すると思われる精神内界的説明の色彩を感じる
とはいえ、[山崎, 1991:221f] は、EM が自己言及的な相互反映性と深く関わらざる
をえないことをよく示している。

ガーフィンケルが関心を向けたのは、日常生活における理解にも社会科学における理解にも通底する問題であった。ガーフィンケルは、社会学の概念構成だけではなく、日常の概念構成も概念化の概念化として捉えるのである。すなわち、社会科学における理解の問題だけでなく日常生活における理解の問題も、他者の理解を理解すること、他者の説明を説明することとして捉えたのである。ガーフィンケルはその問題を reflexivity (相互反映性) の問題と呼んだ。

また、[山崎, 1990:16] の言う「理解の理解」という表現に相互反映性の相互反映性といったものを読み取れる。

- (23) ボーゲン は、ハバーマス(Habermas, J.)の行なったヴィトゲンシュタイン(Wittgenstein, L.) 理解について異論を唱えるという文脈において、ハバーマスを含む旧来のコミュニケーション観を総体としてソシユールのなそれと呼ぶ。彼自身はヴィトゲンシュタイン的なコミュニケーション観に基づく経験的研究を行なっている。【1992 年 8 月、エスノメソドロジー 25 周年記念集会 於 ボストン、アメリカ社会学会 於 ビッツバーグでのボーゲンの発表、及び個人的応答】による。

- (24) クルターは、自分は理解というものを間主観的なものだと考えているが、ガーフィンケルは、それを頭の中にあると考えているという。【1992 年 7 月、早稲田大学での講演】による。

- (25) こうした論法としては[Kripke, 1982=1983]のクワスの例が有名である。

- (26) 現世的推論を成員の行なう言語ゲームのイディオムとして扱う[Pollner, 1987:xi]と
いうことである。

- (27) これらは[Garfinkel, 1967b:89-92]にあたる。但し、ガーフィンケル自身がそこで三つのエトセトラがあるといっているわけではない。また、エトセトラ条項についての議論は[Garfinkel, 1963]、[Sacks, 1963]等にも見られる。

- (28)[Garfinkel & Sacks, 1970:342]において「自然言語への習熟」として定義された「成

員」としての条件あるいは特徴として、こうした「信頼」があること、すなわち場面に応じた適切なエトセトラ条項の行使が挙げられるのだろう。

- (29) EM 理解のうえで、レトロスペクティブな矢印の方向性が重要な意味を持つということ、そして成員の行なう「説明」を知識主張（成員は常にそれが正しいものであるとして言明を行なう）として扱うということについては、1992 年夏に、日本（早稲田大学・慶応大学・明治学院大学）においてクルターが行なった一連の講演で示唆を得た。

- (30) ガーフィンケルは、[Turner, 1974:17= 山田 他, 1987:15-6]において、互いが互いの行為を報告可能にしている様子が EM の対象であるとする。

わたしが言いたいのは、互いに場面を切りぬけるとき何らかの仕方で、彼らが何を一こういう言い方が許されるならば一見抜くかということが、問題とされるということだ。すなわち、そうやって、誰かが尋ねていることのもつ意味が、何らかの方法で、申し分なく彼らに観察でき、注目を引くようになるのだ。またそれは、何らかの仕方で成員の持っている特有のものの見方にとって利用可能である。その特有のものの見方とは、問題の探し方、ざっとものをみる方法、ピンときたり、うまく見抜く方法である。それは、ただ見抜く方法であるだけでなく「問題を見抜き報告する (seeing-reporting)」特有の方法である。そうした方法は「観察でき、報告できる (observable-reportable)」のだ。そうした方法は、観察と報告に利用できる。

つまり、5 章の 2 節で主に述べたように、「話すということが『そこで話された当の場面を構成するという特徴を持っている』」[Turner, 1974:17=山田 他, 1987:16]のであり、こうした構成自体が互いに示され合っているのだ。この点で、成員は状態について実践的に知っている。だがそれにもかかわらず、「彼はこうした（行為による場面の構成という）特徴を無視する。彼はそれを重視したくない。実際彼が望んでいるのは、そうした点から自らを引き離すことである。彼は、（その報告を）彼の行いではなく、日常的な事柄を説明してくなかで彼にとって今やものとして利用可能となったにしろ、世界についての報告である」としたい」（挿入、引用者）[Turner, 1974:17 = 山田 他, 1987:17] のであり、このような成員にとって「見られてはいるが知られてはいない」（seen-but-unnoticed）現象が、研究者にとって記述の対象としてあるということなのだ。ここでは「見られてはいるが知られてはいない」ことを主に非・命題的に知っていると呼んだ。

また、成員の行為と研究者によるその記述のもつ性格についてサックスは、初期の著作において、ガーフィンケルに比べて研究者の立場についてより自覚的に以下のように述べている。

まず、我々のもちいる言語は加工されたものであってはならないのだが、そ

れでも一つのルールはいつも頭に入れておかれるべきだ。そのルールとは、我々が取り扱うものは、記述されたものでなければならないということである。いいかえれば、もしそれ自体が記述されているものでないのなら、なにものも、我々の記述装置の（対象となる）部分として姿を現してはならないのである。（括弧内引用者）[Sacks, 1963:1]

いずれにしる EM が行なうのは「記述の記述」である。但し、付け加えておいたほうがよいのは、例えば、成員が対象を構成するとは言っても、EM 研究者のすべてにとってこれが同じ意味を持っているわけではないということである。この例としては、EM 研究者の間に記述の対象である日常の秩序の性格づけに、かなりの相違が有することを挙げることができる。1993 年 7 月に来日したビルミス (Bilmes, Jack) の整理によれば「会話分析を行なうものにとって、秩序は、そこにはない。ただ事後的な解釈によって、秩序は実際に現象のなかにとりて現れてくる。そして会話分析を行なうものは、ルールや手続きをそこに当てはめることで、どうやってそこに秩序が生じるのかを説明しようとするのだ」（下線、原著者）[Watson & Seiler, 1992:xvii] となる一方で「ガーフィンケルとウィダー (Wieder, L.) は、全く正反対に、EM にとって『秩序はすでに完全な形で具体化されている』といった論をたてる」[Watson & Seiler, 1992:xvii]。このように「記述の記述」が持つ意味は EM 内においても一枚岩ではない。しかし、「記述の記述」というプログラムの言明が「存在論上の恣意的線引」という批判のうち、特に客観主義的二分法であるとする批判に対しては治療的なことは事実であろう。

(31)(c) についての註において、これについて更に説明が加えられているのでその部分も引用しておく。

ここで、公式化が報告可能であるのは、成員が公式化を行なうことができ、また公式化が観察できるという理由だけからではない。それは成員がまさに公式化を行なっており、公式化がそこで行なわれているということを観察しているという点で、報告可能なのである。すなわち、成員が公式化を行なっており、公式化が行なわれたということを観察しているという点で、それは報告可能なのである。言い換えれば、成員が公式化を行なっているときに、公式化をこれから先も行なわれていくはずのものとして観察するという理由で、それは報告可能なのである。あるいはまた、成員が公式化を行なっているとき、公式化がこれまで行なわれてきたはずだと観察するという理由によって、報告可能なのである。[Garfinkel & Sacks, 1970:351]

後の会話分析で力を持ってくる、EM において研究者は「科学」的な観察を行なうべきだ、あるいは行なっているというサックスの研究方法論上の視点と成員が現象として秩序を生み出すというガーフィンケルの視点とがここで一体化したとも言える部分ではないだろうか。

(32) 【1993年5月「教育問題」研究会でのキツセとの応答】による。

既に述べたように、キツセが「存在論上の恣意的線引」の意義をこのように意義づけた背景には、彼自身すでにレイベリング論の段階において徹底した構成論者であったことがあるだろう。つまり本論の用語法・記号法で言えば、彼は、状態⇒定義からのレイベリング論的転回を定義⇒状態（因果関係と構成関係のアマルガム）としてではなく定義⇔状態（知覚・説明行為による対象の構成）として行なっていたのである。

<文献>

Ashmore, Malcom 1989 *The Reflexive Thesis: Wrighting Sociology of Scientific Knowledge*, University of Chicago Press.

鮎川 潤 1992 「社会問題における構築主義的パースペクティブ—エスノメソドロジカル批判を手がかりに」『金城学院大学論集』145:43-73。

Best, Joel 1989a *Images of Issues: Typifying Contemporary Social Problems*, Aldine de Gruyter.

_____ 1989b "Afterword: Extending the constructionist perspective: A Conclusion —and an Introduction", Best [1989a:243-53].

Bogen, David 1992a "Identity, Anonymity, and Play as Organizing Features of Adult Party-Lines", Paper presented at the special meeting (Ethnomethodology: 25 Years Later) of International Institute of Ethnomethodology.

_____ 1992b "Order Without Rules: Wittgenstein and the 'Communicative Ethics Controversy'", Paper presented at the 87th annual meeting of the American Sociological Association, No.260-1. → 1993 *Sociological Theory*, 11(1):55-71.

Bury, M. R. 1986 "Social Constructionism and the Development of Medical Sociology", *Sociology of Health and Illness*, 8:137-169.

Conrad, Peter & Schneider Joseph W. 1980a *Deviance and Medicalization: From Badness to Sickness*, The C. V. Mosby. → 1985 Merill Pulishing. → 1992 Expanded edition, Temple University Press.

_____ 1980b Looking at Levels of Medicalization: A Comment on Strong's Critique of the Thesis of Medical Imperialism", *Social Science and Medicine*, 14A:75-79.

- Coulter, Jeff (ed.) 1990 *Ethnomethodological Sociology*, Edward Elgar Publishing Limited.
- Garfinkel, Harold 1952 *The Perception of The Other: A Study in Social Order*, (Unpublished Ph.D. Dissertation. Harvard University).
- _____ 1956 Conditions of Successful Degradation Ceremonies, *American Journal of Sociology*, 61(March): 420-424.
- _____ 1963 "A Conception of, and Experiments with, 'Trust' as a Condition of Stable Concerted Actions", Harvey, O. J. (ed.) *Motivation and Social Interaction*, Ronald Press: 187-238. → Coulter [1990:3-54].
- _____ 1964 "Studies of the Routine Grounds of Everyday Activities", *Social Problems* 11-3:225-250. → [Garfinkel,1967a:35-75]. = 1989 北澤 裕・西坂 仰 訳「日常生活の基盤-当たり前を見る」北澤 裕・西坂 仰 訳『日常性の解剖学』マルジュ社：31-92.
- _____ 1967a *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall, Inc. → 1984 Polity Press.
- _____ 1967b "Common Sense Knowledge of Social Structure: the Documentary Method of interpretation in Lay and Professional fact Finding", [Garfinkel, 1967a:76-103].
- _____ 1968 "The Origins of the Term 'Ethnomethodology'", Richard J. Hill and Kathleen Stones Crittenden (eds.) *Proceedings of the Purdue Symposium on Ethnomethodology (Institute Monograph Series No.1)*, Institute for the Study of Social Change, Purdue Univ.: 5-11. → Turner [1974:15-18] = 1987 山田 富秋・好井 裕明・山崎 敬一 訳「エスノメソドロロジー命名の由来」山田 他 [1987:9-18].
- Garfinkel, Harold & Harvey Sacks 1970 "On Formal Structures of Practical Actions", John C. McKinney & Edward A. Tiryakian (eds.) *Theoretical Sociology : Perspective and Developments*, Appleton-Century-Crofts:337-366. → Coulter [1990:55-84].
- 浜 日出夫 1992 「現象学的社会学とエスノメソドロロジー」好井 裕明 編『エスノメソドロロジーの現実』世界思想社：2-22.
- Heritage, John 1984 *Garfinkel and Ethnomethodology*, Polity Press.
- 榎田 美雄 1991a 「社会学における秩序問題-ハロルド・ガーフィンケルの作品およびA市中間施設参与観察データからの若干の考察-」筑波大学大学院博士課程社会科学部研究科中間評価論文（筑波大学社会学研究室在）。
- _____ 1991b 「アグネス論文における＜非ゲーム的パッシング＞の意味-エスノメソドロロジーの現象理解についての若干の考察-」『年報筑波社会学』3:74-98.

- 樫村 志郎 1988 『「もめごと」の法社会学』 弘文堂。
- King, Dave 1987 "Social Constructionism and Medical Knowledge", *Sociology of Health and Illness*, 9:352-377.
- Kitsuse, John I. & J. W. Schneider 1989 "Preface", Best [1989a:xi-xiv].
- Kripke, Saul A. 1982 *Wittgenstein on Rules and Private Language. An Elementary Exposition*, Basil Blackwell. = 1983 黒崎 宏 訳『ウィットゲンシュタインのパラドックス』産業図書。
- Mehan, Hugh & H. Wood 1975 *The Reality of Ethnomethodology*, John Wiley & Sons, Inc.
- Miller, Gale & James A. Holstein (eds.) 1993 *Constructionist Controversies: Issues in Social Problems Theory*, Aldine De Gruyter.
- 中河 伸俊 1989 「クレイム申し立ての社会学—構築主義の社会問題論の構成と展開（上）」『富山大学教養部紀要（人文・社会科学篇）』22(2):57-73.
- _____ 1990 「クレイム申し立ての社会学—構築主義の社会問題論の構成と展開（下）」『富山大学教養部紀要（人文・社会科学篇）』23(2):49-79.
- 岡田 光弘 1993 「『スポーツ問題』の社会学へ向けての基礎理論的考察」第二回日本スポーツ社会学会・一般研究報告。
- 大村 英昭・宝月 誠 1979 『逸脱の社会学—烙印の構図とアノミー』新曜社。
- Pollner, Melvin 1975 "The Very Coinage of Your Brain: The Anatomy of Reality Disjuncture", *The Philosophy of the Social Sciences*: 5:411-30. = 1987 山田 富秋・好井 裕明・山崎 敬一 訳「お前の心の迷いでスーリアリティ分離のアナトミー」山田・好井・山崎 [1987:39-80] .
- _____ 1974 "Sociological and Common-Sense Models of Labelling Process", Turner [1974:27-40].
- _____ 1978 "Constitutive and Mundane Versions of Labeling Theory", *Human Studies*: 269-88.
- _____ 1987 *Mundane Reason: Reality in Everyday and Sociological Discours*, Cambridge University Press.
- _____ 1991 "Left of Ethnomethodology: The Rise and Decline of Radical Reflexivity", *American Sociological Review*, 56 (June):370-380.
- Rafter, Nicole H. 1992 "Some Consequences of Strict Constructionism", *Social Problems*, 39:38-9.
- Rorty, Richard 1993 *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton Univ. Press. = 1993 野家 啓一 監訳『哲学と自然の鏡』産業図書。

- Sacks, Harvey 1963 "Sociological Description", *Berkeley Journal of Sociology*, 8,1-16, → Coulter [1990:85-95].
- _____ 1972a "An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology", David N. Sudnow (ed.) *Studies in Social Interaction*, Free Press, 31-74, 430-31. → Coulter [1990:208-53].
- _____ 1972b "On the Analyzability of Stories by Children", J. J. Gumperz & D. Hymes (eds.) *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, Holt, Reinhart & Winston. 329-345. → Turner [1974:216-232]. → Coulter [1990:254-70].
- 椎野 信雄 1989 "On Sociological Studies of Science: A Disparity Between the 'New' Sociology and Ethnomethodology", 『人文学報』東京都立大学人文学部 210:81-100.
- Spector, Malcolm & John I. Kitsuse 1977 *Constructing Social Problems*, Cummings, → 1987 Aldine de Gruyter, = 1990 村上 直之・中河 伸俊・鮎川 潤・森 俊太 訳 『社会問題の構築ーラベリング理論をこえてー』マルジュ社。
- _____ 1987 "Preface to the Japanese Edition: Constructing Social Problems", SSSP Newsletter 18 (Fall):13-5. = 1990 村上 直之・中河 伸俊・鮎川 潤・森 俊太 訳「日本語版のための補章」村上 他 [1990:271-84].
- Strong, P. M. 1979 "Sociological Imperialism and the Profession of Medicine", *Social Science and Medicine*, 13A:199-215.
- 水津 嘉克 1992 「社会学的分析対象としての「排除」ー「構築主義」的視点の可能性」『ソシオロギス』ソシオロギス編集委員会 16:101-118.
- Troyer, Ronald. J. 1992 "Some Consequences of Contextual Constructionism", *Social Problems*, 39: 35-7.
- Turner, Roy (ed.) 1974 *Ethnomethodology*, Penguin Books Ltd.
- Watson, Graham & Robert M. Seiler (eds.) 1992 *Text in Context: Contributions to Ethnomethodology*, Sage Publications, Inc.
- Woolgar, Steve 1983 "Irony in the Study of Science", Karin D. Knorr-Cetina & Michael Mulkay (eds.) *Science Observed: Perspectives on the Study of Sciences*, Sage, 239-266.
- _____ (ed.) 1988a *Knowledge and Reflexivity: New Frontiers in the Sociology of Knowledge*, Sage.
- _____ 1988b "Reflexivity Is the Ethnographer of the Text", Woolgar [1988a:14-34].
- Woolgar, Steve & Malcom Ashmore 1988 "The Next Step: An Introduction to the Reflexive Project", Woolgar [1988a:1-11].

- Woolgar, Steve & Dorothy Pawluch 1985a "Ontological Gerrymandering : the Anatomy of Social Problems Explanations", *Social Problems*, 32:214-227.
- _____ 1985b "How Shall We Move Beyond Constructionism?", *Social Problems*, 33:159-62.
- 山田 富秋 1982 「言語活動と文化的相対性ーエスノメソドロロジーの自然言語をめぐる」『社会学研究』東北社会学研究会 42-43:387-401.
- 山田 富秋・好井 裕明・山崎 敬一 編訳 1987 『エスノメソドロロジーー社会学的思考の解体』せりか書房。
- 山崎 敬一 1990 「いかにして理解できるのかー『意味と社会システム再考』ー」『理論と方法』数理社会学会 5-1:2-2.
- _____ 1991 「主体主義の彼方にーエスノメソドロロジーとは何かー」西原 和久 編『現象学的社会学の展開』青土社 213-52.
- _____ 1993 「ガーフィンケルとエスノメソドロロジー的関心ーリフレキシビティーと社会的組織化の問題ー」佐藤 慶幸・那須 壽 編『危機と再生の社会理論』マルジュ社 333-51.
- 山崎 敬一・佐竹 保宏・保坂 幸正 1993 「相互行為場面におけるコミュニケーションと権力ー＜車いす使用者＞のエスノメソドロロジー的研究ー」『社会学評論』日本社会学会 44(1):30-45.

(おかだ みつひろ／筑波大学大学院)